

沖縄農業の ニューフェイスたち

平成十八年四月、「県農業試験場」は、本場と園芸支場を統合して糸満市に移転。名称を「県農業研究センター」に改めました。また、研究体制も一新。今までの「研究室」を廃止し、複数の研究分野を担当する「班」とすることで、より柔軟に研究開発に取り組むことができるようになりました。今回は、農業研究センターで、最近育成・開発したニューフェイスたちをご紹介します。



サトウキビ「農林二十一号」

沖縄の方言で「ウーシ」と呼ばれ、県内で最も多く栽培されているサトウキビは、気象条件や土壌条件など地域に適した品種が求められてきました。特に、毎年のように台風の影響を受ける久米島では、台風や塩害に強い品種が望まれています。

そのため、センターでは、平成五年頃から、優秀な品種同士のかけ合わせや試験栽培などを実施し、久米島向けの新品種「農林二十一号」を育成。今年、県の奨励品種として採用される予定です。

「農林二十一号」は、台風強い上、春植え、夏植え、株出しのいずれの場合でも収量が多く、糖度の高いことが特徴。今後、久米島を中心に普及を図っていきます。



農林21号

パイナップル「沖繩八号」「ナツヒメ」

これまで缶詰加工中心だった県内のパイナップル生産は、農産物の自由化を契機に、平成二年頃から徐々に生食用パイナップルの比重が高まってきました。

収益性の高いパイナップル生産をめざして本格的な生食用品種の改良が行われるようになり、現在は輸入品との差別化を図るため、個性豊かなおいしいパイナップルの育成・普及が進められています。

国内にはフィリピンなど海外からもたくさんパイナップルが輸入されていますが、沖縄の生食用パイナップルは完熟した芳醇な香りとおいしさが人気で贈答品やみやげ品として県民や観光客に親しまれています。

「沖繩八号」は今年種苗登録する予定の最も新しい品種です。熟期が七月中旬と従来の品種より一ヶ月も早いパイナップルです。



沖繩8号

紅イモ「沖夢紫」

近年、健康志向の高まりに伴い、ポリフェノールが豊富な県産紅イモの需要が拡大しています。

現在、県内で栽培されている味の良い紅イモとしては「宮農三十六号」と「備瀬」があります。

「宮農三十六号」は、皮が赤く外観が良いので、市場や消費者から人気がありますが、立枯病にとても弱いため栽培が難しい品種です。

また「備瀬」は、立枯病に強いものの皮が白く、外観があまりよくありません。

そこで、センターでは、人気の高い「宮農三十六号」に代わる赤い皮の品種として「沖夢紫」を育成しました。「沖夢紫」は、皮色・肉色共に紫色で、甘く粘りのある食感が特徴です。



沖夢紫(おきゆめむらさき)

ゴーヤー「島風」

センターでは、ゴーヤーの生産振興を図るために昭和六十二年から品種育成の研究に取り組み、平成四年に春夏栽培の「群星(むるぶし)」を、平成七年に秋冬栽培の「汐風」をそれぞれ育成し、普及を図ってきました。

しかし、「群星」や「汐風」は、雌花数が多いため、ミツバチなどの昆虫により交配が行われると、着果が多くなりすぎてしまい、樹の勢いが低下し収量が減少してしまいます。

そのため、露地栽培には適さず、ビニールハウスなどで、人工的に交配して着果の数を調整しながら栽培する必要がありますがありました。

そこで、雌花数などを改良した「島風」を育成。平成十五年に種苗登録しました。「島風」は、露地栽培に適した品種として、高い収量が見込まれています。



島風

これまでに育成された品種の中で最も大きく、重さは約一・四kg。果肉が黄色で柔らかく、甘い味わいが特徴です。

また、「ナツヒメ」は多用途向け品種の育成を目的に開発された鑑賞用のパイナップルです。

パイナップルの野生種にガンマー線(放射線)を照射してできた突然変異株の中から選抜されました。

緑の葉にピンクや黄色のたてじまが入り、長い茎の先端にとても小さな果実が着きます。

果実は小さいままで食べられません。が、葉や果実が美しく、長い間楽しめるため、切り花やインテリアプランツとして期待されています。



ナツヒメの果実



ナツヒメ

キク「沖のひかり」「沖の乙女」

常に新しい品種が求められる花き市場では、近年、切り花単価が低迷しており、生産者から低コストの品種を育成することが望まれています。

そのため、センターでは、新たに「沖のひかり」と「沖の乙女」を育成しました。どちらも、水をよく吸い込み、長期間花を楽しめます。

また、害虫マメハモグリバエからの被害や病気の発生が少ないため栽培しやすく、比較的揃って開花するので、彼岸や年末などキクの需要が高まる時期に一斉に収穫することができます。



沖のひかり



沖の乙女